

# 敦煌写本書儀の言語表現に反映される社会環境 —吉凶書儀を中心として—

山本孝子

京都大学大学院文学研究科 博士課程  
(現 京都大学高等教育研究開発推進機構 非常勤講師)

## 緒言

「書儀」とは、古人が手紙を書く際の参考に供するための模範文例集である。20世紀初頭に発見された敦煌文献中には、史志の記録から書名が知られるだけであった、あるいは書名すら知られていなかった書儀が写本のかたちで大量に残されていた。

これらの書儀は、それぞれ時代の変化や地域的特性、社会のニーズに応じて、徐々にその内容・スタイルを変えながら改編・生産が繰り返されていたものであることが知られる。そのため、当時当地の実態を如実に反映する資料として重要な役割を果たしているのである。

本研究では、敦煌より発見された書儀写本のうち、吉凶書儀を主な研究対象とする。これらは、則天武后期から曹氏帰義軍期（7-10世紀）にかけて広く流行したもので、約20種90件が現存する。

吉凶書儀の他と異なる特徴の一つは、模範文を収録するだけでなく、凡例や本文に附される註釈によって細やかな規定を示している点にある。

また同時に、各場面で必要となる礼儀作法も盛り込まれ、記述が日常生活のあらゆる面に及んでいることから総合書儀とも称される。吉凶書儀の利用対象や使用範囲、収録内容は多岐にわたり、一般庶民の風俗習慣を示すものもあれば、政治、外交や法制を色濃く反映するものもある。

このような資料を利用し、言語表現として外面化した事象から、その背後に存在する社会の実態を解明することが、本研究の主要な目的の一つである。

吉凶書儀に収録される内外族・僧尼・四海・婦人・官僚の各書儀のうち、四海書儀および僧尼書儀についてはすでに一定の結論を得ていたため、今年度の研究では「内外族書儀(血族・姻族間で取り交わされる書簡の模範文)」を中心に検討を加え、その成果は「書儀の普及と利用—内外族書儀と家書の関係を中心に」（高田時雄編『敦

煌写本研究年報』第6号、pp.169-191、2012年）として公表した。以下にその概要を記すこととする。

## 考察・結果

### 1. 資料について—書儀と書簡文

書簡とは、古代の人々にとっては、重要な通信手段であり、人間関係を円滑に保つためにも欠かすことのできないもので、実用的な役割を担っていた。独自の書式や文体を持ち、当事者でなければ理解し難い内容も含まれる。書儀もまた特に実用書として、日常的に用いられたものである。

よって、それは利用者の感覚と合致していたはずであり、そこに当時の社会通念、人びとの規範意識が映し出される、と判断できる。換言すれば、そこには社会的規範的な言語表現や行動様式が凝縮されているということである。

書儀は、その実用性の高さゆえに、時宜に合わなくなれば新しいものにとって代られるため古いものが残されることはなく、敦煌写本中に見出されるその実例は当時の社会関係を研究するうえで極めて貴重な材料として重んじられてきた。また同時に残された書簡文は、書写された当時のありのままの姿を伝えるという点に非常なる価値を有する。

その中には当事者でなければ理解し難い内容が多く含まれる一方で、時代背景・社会環境を反映した記述も見える。家書についても例外ではなく、家族間の私的な文面の中にも日常生活に関わる社会の実態が反映されている。内外族書儀とは一定の隔りがあるとはいえ、書式や語句などはやはり共通する点も少なくない。規範的モデルである書儀に基づき実践した事例として、これらの資料を組み合わせうまく活用することで、書儀の運用についても何か解決の糸口を見出すことができるのではないかと考えた。

## 2. 内外族書儀について

### 2.1 吉凶書儀に収録される他の書儀との関係から

申請者はこれまでの研究において敦煌発見の吉凶書儀に収録される四海書儀・僧尼書儀について考察を行い、その過程で、これらの書儀は共通して内外族書儀の書式・言語体系を基準としつつ、書簡の差出人・受取人両者の関係やその時々状況に合わせて変化させ、応用されていることを確認している。言い換えれば、内外族書儀を摸倣することにより、血縁によらない擬似的な家族関係が書簡中に再現され、差出人と受取人両者の関係が保たれていたのである。

本研究では、呼称表現の使用原理を明らかにすることで、内外族内の地位・序列を解明することを試みた。呼称には、呼びかける側と呼びかけられる側の親密さや距離が現れると考えられるためである。

その結果、次の3点が明らかとなった。(1) 直系の尊属と卑属間の書札礼は内外問わず同等である、(2) 書簡文中で第三者に言及する場合、直接的に血縁通りの呼び方と、間接的な呼称を使い分けることにより、差出人・受取人・第三者間の距離が体现され、内族と外族の親疎の別が表現される、(3) 直系の血族の間では男女差は見られないが、姻族の場合は状況が異なる。

### 2.2 家書との比較から

家書の実例において、現存の書儀との間に類似の語句が見いだせない場合でも、複数の家書に近い言い回しが用いられていることがある。その背景には、どのような場合にどのような相手に対してどのような書式・表現を用いるのか、という取り決め・認識が、社会的に共有されていたことが考えられる。

そして、それを広める媒体として、またその規定の内容を理解し参照するための手段として、すでに失われてしまったものも含め、かなりの種類の書儀が存在したことが推測されるのである。また、敦煌写本中に見える書儀・書簡文資料は、敦煌という特定地域の一例であり、偶然に遺されたものであるという点を配慮し、トルファンや日本など他の地域に残る資料も参照し、現存の書儀がどの程度に普遍性をもちうるのか、書儀の普及という観点からも検討を加えた。

その結果、(1) 書儀・書簡文に用いられる言語は、書札礼に基づく規範的な書き言葉だけでなく、口語的な表現も含まれる、(2) 敦煌写本書儀とトルファン発見の家書の間共通する語句が存在する、(3) 現存する敦煌発見の書儀には見られない「委曲」という下行文書の

書式が存在し、家書と公文書に共通して用いられるものであった、ということが確認できた。

### 今後の課題

吉凶書儀に収録される内容のうち、残る婦人書儀と官僚書儀についても引き続き検討していかねばならない。婦人書儀とは、差出人として女性を想定した模範文例が集められたものであるが、受取人はすべて内外族の範疇に属する人物であり、今回の研究で扱った資料とも密接な関連性を持つ。特に夫婦間で交わされる書簡の文例などから言語のジェンダー的非対称性や書儀の言語規範に現れる唐代の女性の家庭内での地位などについて考えていきたい。

また、官僚書儀については、公文書と私信の関係、書儀の変化・発展についてもさらに詳しく考える必要があるだろう。最終的には、トルファンや域外文獻なども視野に入れつつ、唐代の社会・文化における敦煌吉凶書儀の位置付けについても明らかにしていきたい。

### 要約

内外族書儀とは、親族・姻族間で遣り取りされる書簡文、つまり家書の模範文を集めたものである。規範的モデルである書儀と、それに基づき実践した事例として、実際の書簡文を比較することで、書儀の運用の有様、普及の状況を明らかにすることを試みた。

その結果、書儀は書簡を書く際の言語規範の拠り所として中心的な役割を果たしていたが、実際には礼に反しない範囲である程度の流動性を以って利用されていたことが見てきた。

また、敦煌だけでなく他地域で書写された家書も含めて、共通の書式・定型句を見出し、これは当時書儀が広く一般に用いられていたことを反映するものであると結論づけた。

### 謝辞

本研究を遂行するにあたり、公益財団法人三島海雲記念財団より助成金を賜りました。ここに記して関係各位に厚く御礼申し上げます。

## 参考文献

- 1) 趙和平：『敦煌写本書儀研究』、新文豐出版、1993
- 周一良・趙和平：『唐五代書儀研究』、中国社会科学出版社、1995
- 2) 趙和平：『敦煌表状箋啓書儀輯校』、江蘇古籍出版社、1997
- 3) 吳麗娛：『唐礼摭遺：中古書儀研究』、商務印書館、2002
- 4) 張小豔：『敦煌書儀語言研究』、商務印書館、2007